

マルコによる福音書 12 章 18 節～27 節

2018 年 1 月 25 日

古本 靖久

1、聖歌 522 番 「神ともにいまして」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 86 ページ）

4、テキストの位置

イエス様たち一行はエルサレムに入り、様々なグループと議論を戦わせていきます。

祭司長、律法学者、長老たちには神さまからの権威について語り、ファリサイ派やヘロデ派には皇帝への税金についての話をします。

そして今回登場するのは、サドカイ派の人たちです。サ

ドカイ派という名前の由来は正確には分かっていません。しかしダビデ王とソロモン王の時代の祭司であったツァドクに由来しているという説が有力です。

彼らサドカイ派は上級祭司階級であり、彼らの中から大祭司が選ばれていました。また貴族階級の出身者も多く、裕福であったようです。イエス様の時代にはその活動範囲はエルサレム神殿に限定されており、紀元 70 年のエルサレム神殿崩壊と共に没落しました。

またサドカイ派はモーセ五書のみを唯一の権威として認めていたので、律法（モーセ五書）、預言、諸書の他に口伝律法を重んじるファリサイ派とは、異なる立場にありました。その彼らが質問した内容とは何だったのでしょうか。

エルサレムにて	月曜日	11:12-14	いちじくの木
		11:15-19	神殿とは
	火曜日	11:20-26	信仰と祈り
		11:27-33	神からの権威
		12:1-12	取り上げられる実り
		12:13-17	神のものは神へ
		12:18-27	生きている者の神
		12:28-34	たいせつな掟
		12:35-37	キリストとは
		12:38-40	律法学者批判
12:41-44	たくさん入れた人		

5、節ごとに

◆生きている者の神

12:18 (そして) 復活はないと言っているサドカイ派の人々が、イエス(彼)のところへ来て尋ね(て言っ)た。

キリスト教では「復活」という言葉を当たり前のように用います。イエス様の復活がなかったならば、わたしたちの信仰は意味を持たないといっても過言ではありません。ところがこの場面に登場するサドカイ派は、復活を信じていませんでした。

実は旧約聖書をよく読んでいくと、死人の復活についての言及は数か所しか見られません。特にモーセ五書と呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記には、復活という考えはまったく出て来ません。

数ある宗教の中で死後の報いという思想がないのは大変珍しいことですが、サドカイ派が信じていたモーセ五書には確かに復活信仰がなかったのです。そのため、彼らは復活を信じていませんでした。

では、復活信仰はどこから生まれたのでしょうか。ダニエル書など旧約聖書の中でも後期に書かれた文書には、死人の復活についての記述があります。イエス様の誕生より数百年前、迫害を受けていたユダヤ人は、律法に忠実に生きているならば、たとえ無駄死に見える死に方をして、豊かな報いを受けると信じるようになります。

そのような考えは正しいのか、つまり復活はあるのかというのがサドカイ派の質問です。そして復活があるならば、律法との矛盾があるのではないかという指摘もするのです。

12:19 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『(もしも) ある人の兄が死に、妻を後に残して子がない(を残さなかった)場合、その弟は兄嫁と結婚して(その妻を取り)、(自分の)兄の(ために)跡継ぎ(子)をもうけねばならない(起こすように)』と。

最初に彼らはレビラート婚という律法をもとに、復活信仰の矛盾点を指摘します。申命記 25 章 5～6 節にこのようにあります。

兄弟が共に暮らしていて、そのうちの一人が子供を残さずに死んだならば、死んだ者の妻は家族以外の他の者に嫁いではならない。亡夫の兄弟が彼女のところに入り、めとって妻として、兄弟の義務を果たし、彼女の産んだ長子に死んだ兄弟の名を継がせ、その名がイスラエルの中から絶えないようにしなければならない。(申命記 25 章 5～6 節)

このようにレビラート婚は、未亡人となった妻が「やもめ」とならないように、兄弟が責任をもって面倒を見るというものです。ところが実際には大切なのは「子孫を残す」ことであって、女性は子どもを産むための道具としか考えられていなかったようです。

また弟にとっても、兄嫁のところに入ることは正式な結婚ではなく、子どもが出来たとしても死んだ兄の子とみなされるため、遺産はすべてその子のものとなります。そのため創世記には、このような事件も起こっています。

ユダの長男エルは主の意に反したので、主は彼を殺された。ユダはオナンに言った。「兄嫁のところに入り、兄弟の義務を果たし、兄のために子孫をのこしなさい。」オナンはその子孫が自分のものにならないのを知っていたので、兄に子孫を与えないように、兄嫁のところに入る度に子種を地面に流した。彼のしたことは主の意に反することであったので、彼もまた殺された。(創世記 38 章 7~10 節)

イエス様の時代にこの習慣がまもられていたという証拠は、ほとんど残っていません。この会話をしている時点でも、かなり昔のしきたりになっていたようです。

12:20 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎え(取り)ましたが、跡継ぎ(子)を残さないで死にました。

12:21 (そして)次男がその女を妻にし(取り)ましたが、跡継ぎ(子)を残さないで死に(ました。)、(そして)三男も同様でした。

12:22 こうして(そして)、七人とも跡継ぎ(子)を残しませんでした。(皆の)最後にその女も死にました。

サドカイ派は極端な例を挙げて、イエス様に質問をします。7人の兄弟が次々と死んでいく。彼らは兄嫁の元に入りますが、誰一人として子孫を残すことができませんでした。

日本でもつい最近まで(現代でも?)、子どもを産むことができない女性が肩身の狭い思いをしていました。「子どもまだ?」という何げない一言に傷つく人も多くいます。女の子が生まれて喜んでいる中、「次は男の子ね」と言われてしまう。結構身近に聞くこともあるのではないのでしょうか。

サドカイ派は単に「たとえ」として取り上げたかもしれませんが、この話に出てくる女性は、どのような気持ちでいたのでしょうか。自分は子どもを産むためだけにいるのだろうか。そのような気持ちもくみ取ることができたらと思います。



12:23 復活の時、(もしも)彼らが復活すると、その女は(彼らのうち)だれの妻になるのでしょうか。(というのも)七人ともその女を妻にしたのです。」

サドカイ派の、「復活のとき、もしも彼らが復活すると」という言葉から、「復活なんて本当はないのだけれども」という本音がくみ取れます。

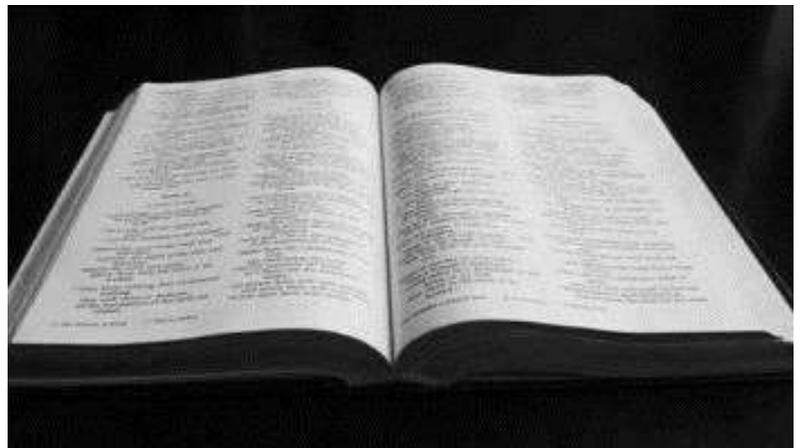
主な答えとしては、このようなものがあると思います。みなさんはどれだと思われますか。

- ①全員 ②長男 ③七男 ④だれとも違う

①は姦淫の罪を犯してしまうのでアウトです。この問いはファリサイ派が実際におこなっていたもので、彼らは②だと考えていたようです。わたしは、妻としては最後の夫が一番いいのでは?と考え、③を選びました。最後に一緒になった人と、一番仲がいいと良いなという願望からです。ただし自分が選んだ相手ではないので、愛情があったのかどうかはわかりませんが。

12:24 イエスは(彼らに)言われた。「あなたたちは聖書も神の力も知らないから、そんな思い違い(間違い)をしているのではないか。」

イエス様はサドカイ派の根本的な間違いを指摘します。彼らの間違いは、「聖書も神の力も知らない」ということです。サドカイ派は聖書をよく読み、信じていました。しかし彼らは、「文字通り」理解するだけにとどまり、自分の頭で理解できる範囲で受け入れているのです。



ある本にこのように書かれていました。「学究的な人は、聖書を理解するが神の力を知らない」、「熱狂的な人は、神の力を知ってはいるが聖書を知らない」。

どちらの人も、自分の都合の良いように神さまを使っているのかもしれませんが。理解のできることしか信じない。自分を正当化するために聖書のある部分だけを引用する。このようなことは、わたしたちの日常にもあることです。

イエス様は自分たちの理解の範囲だけで復活について質問する、サドカイ派の姿勢を厳しく批判したのです。

12:25 死者（死人）の中から復活するときには、めとることも嫁ぐ（めとられる）こともなく、（天にいる）天使のようになるのだ。

当時は男権社会でした。したがって婚姻の主体はあくまで男性です。原文通りだと、男性はめとり、女性はめとられるという関係性が明らかにされています。

しかし復活のときにはそのような関係性からも解放されるというのです。サドカイ派が質問したような人間的制度は、復活の時には存続しません。地上にいたときの関係性によって、拘束されることはないのです。

復活した人は、天使のようにたとえられます。といっても、天使のイメージはあまりないかもしれません。

クリスマス物語には天使ガブリエルが出てきます。また旧約続編のトビト記には天使ラファエルが出てきます。ラファエルは何も食べないそうです。すべての束縛から解き放たれるのが復活です。ファリサイ派の固定観念からも解放されるのです。

12:26 死者（死人）が復活する（よみがえる）ことについては、（あなたがたは）モーセの書の『柴』の個所で、神がモーセ（彼）にどう言われたか、読んだことがないのか。『わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である』とあるではないか。

ではそもそも復活はあるのでしょうか。そのことに対して、イエス様は答えます。モーセの書の「柴」の個所を見なさいと。もともと聖書には章や節はなく、便宜上あとからつけられたものですから、何章・何節という言い方はできません。そこで出エジプト記の「燃える柴」について書かれたところを、「柴」の個所と呼んでいました。

燃える柴から、神さまはモーセにこう語ります。

神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。（出エジプト記 3 章 6 節）



神さまはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神だと言われています。また旧約聖書の中では、神さまは死人の神ではありえないという指摘が頻繁に出てきます。

出エジプトの目的地であるカナンの地を、神さまはアブラハムたちに与えると約束されました。だからカナンに入るまで、アブラハムたちは生きていないといけないのです。

12:27 神は死んだ者（死人）の神ではなく、生きている者の神なのだ。あなたたちは夫変な（ひどく）思い違いをして（間違っ）ている。」

多少屁理屈のように感じるかもしれませんが。しかし神さまがアブラハム…の神と言っている以上、彼らは神さまの元で今、生きているはずだと考えられるのです。神さまは生きている者の神さまであるので、死人の名前を使って自己を啓示することはないのです。

「神は死人の神ではなく」と言われると、わたしたちはドキッとします。すでに天に召された人たちは見捨てられたのだろうかと思ってしまう。しかしイエス様が言いたいのはそうではありません。

神さまは、「わたしはあなたと共にいる」という約束を果たすために、わたしたちに永遠の命を与えてくださったのです。お葬式の中で、「死は新しい生の始まり」という話をします。死がすべての終わりならば、神さまとの関係はそこでおしまいです。しかし神さまはそれを望みませんでした。神さまはいつまでもわたしたちと一緒におられるために、わたしたちを死の中から引き上げられ、生かしてくださる。それがイエス様の言う「復活」なのです。

<今日の箇所から>

復活って本当にあるのだろうか。復活したら家族や友人とはどのような関係になるのか。そのような思いを持ったことはないですか。しかしもしも復活がなかったとしたら、わたしたちはその日の快樂にふけり、人のために自分を犠牲にしようなどという考えがなくなるのかもしれない。

聖書はイエス様の復活を描きます。けれどもこの復活でさえ信じることができず、「これさえなければキリスト教を信じることができるのに」と言う方もおられるほどです。

イエス様は、自分の価値観や経験だけで物事を判断する人々に、「間違っている」と言われます。神さまの力は、わたしたちの想像をはるかに超えるのです。神さまはわたしたちを愛してくださっています。その愛する一人ひとりを、死のうちに見捨てることはしないというのが、神さまの約束です。

わたしたちはその約束を信じて、歩むのです。「わたしたちは死んでも生きる」、それがわたしたちに与えられた「復活」の信仰なのです。

今回の学びはこれで終わります。次回は 2 月 22 日(木)10 時 30 分からです。「たいせつな掟、キリストとは（マルコ 12：28～37）」について学んでいきます。